

パネルディスカッション「中国医薬・鍼灸の自国化再考」

[基調講演]

日本医学史のなかの中華幻想

橋本 雄

北海道大学

枕詞

筆者はこれまで、中世日本の国際交流史、とくに外交や貿易といった制度面を中心に勉強してきた。この数十年ほどは、雪舟(水墨画)や珠光(喫茶文化)、「和漢」概念の再定義など、いわゆる“文化史”や“文化交流史”を探究している。そのなかで、期せずして医学にまつわる交流がほの見えてくることがある。

そこで、むしろ、医学史の素人だからこそ見えてくることを、この場をお借りして開陳してみたい。“医学史”という枠組みから一旦離れて、日本の国際交流史や対外観の展開のなかから、医学史の齟齬を再安置できないかと期するものである。

最初に、演題に掲げた《中華幻想》という新奇な言葉についても言及しておこう。端的に言うと、「中華にあこがれ、「中華なるもの」を自在に思い描き、それとのギャップにもだえ苦しむ、という一種の《妄想癖》である」(橋本『中華幻想』2012年)。——いわば見栄の張り合い、世界観のぶつかり合いが潜在的あるいは顕在的に存在してきた。医道を含む文化や技術の交流史にあっても、この《中華幻想》の見立ては無縁ではない。

1. 中世初期の日本と中国——国風文化のなかの医学

11世紀以降の中世日本では、各種の権門勢家が並び立つ、権力の分散状態があらわれた。そして、天皇や摂関家・寺社といった諸権門を中心に、山野河海に広がる領域型荘園が作られ、潤沢な資金をもとに国際交易が展開された。宋海商が日本を訪れ、商売交易をするなかで、新しい医学や薬品が貴族たちのもとに輸入された。

また、後白河・平氏政権期になると、医書の輸入がさかんになり、ほとんど時を措かず日本の宮廷医に採用されたという。和氣氏や丹波氏以外の、新規参入を図る医家が、新たな中国医学にとびついたことも指摘されている。こと医療の面に関していえば、日本は進取の氣勢を持ち合わせていたといえよう。

2. “知恵比べ・力比べのモチーフ”——“日本スゴイ”の原型

後白河院政期の時代に創られた、《吉備大臣入唐絵巻》(ボストン美術館蔵)は、遣唐使として中国に渡った吉備真備が、唐の皇帝の繰り出す知恵比べに尽く打ち勝つ、という荒唐無稽なストーリーを絵画化したものである。一部、鬼(亡霊)となった阿倍仲麻呂の助けも借りるが、そもそも仲麻呂は日本人であり、玄宗皇帝に寵愛されるほどの賢臣であった。

要するに、この吉備真備入唐譚は、古代日本の誇る賢人たちが、中国で道場破りを繰り返す、という筋書きであり、これを私は“知恵比べ・力比べのモチーフ”と呼んでいる。誤解を恐れずにいえば、“日本は大国中国に打ち勝つほどの、スゴイ国だ、人間なのだ”という口吻である。このモチーフは、後にみるように、後世、繰り返し歴史に現れる。“中国皇帝に認められる日本人”というのが、典型的な主人公の特徴である。

3. 中華皇帝に認められた日本人——絶海中津・仲方中正

国家的な外交関係のない宋代になると、遼(契丹)や金など北方勢力との対抗上、宋廷は、日本人(入宋僧)を厚遇し始める。たとえば、①勅版一切経などを皇帝から賜給された齋然、②飛鉢の法を皇帝に見せた寂照、③皇帝に拝謁し祈雨の法を実現した成尋。彼らは、大師号を賜与されるなど、皇帝の恩典にあずかった。ただし、②③の活躍ぶりや皇帝への拝謁(①)は中国側史料で確認できず、あくまでも日本の説話・伝記史料にのみ登場する。つまり、上記の入宋僧の活躍は、日本側で脚色され、創造(想像)された話に過ぎないのである。

一方、そうした日本人の“活躍譚”がふたたび喚起される場が、明代初期、南京は太祖洪武帝の宮廷に現れた。洪武帝は、唐や宋にならい、強烈な君臣秩序や華夷意識をふりかざした。イデオロギッシュでエネルギッシュな洪武帝は、積極的に蕃夷を引見し、天下に明の偉大さ、皇帝の徳の高さを弘めようと工夫した。その蕃夷のなかにも、日本人がいたわけである。

とりわけ絶海中津は、洪武帝への謁見、そして皇帝との漢詩の唱和がゆるされた点で際立っている。実際、彼の漢詩文は明の文人官僚や高僧たちからの評価が高く、「日東語言の習気なし(日本語っぽくない)」と絶賛された。

もう一人、明代初期に中国でその力量を認められた(とされる)禅僧に、仲方中正がいる。仲方の法弟(おとうと弟子)の横川景三が1474年に語るところでは、仲方は1401年(明・建文3年)に遣明使(義満が派遣した祖阿・肥富一行)に加わって渡海、皇帝の命を受けて「永樂通寶」の四文字を揮毫したのだという(その後、永樂帝の時代まで中国に滞留し続けた可能性は著しく低い)。ところが、永樂通寶が最初に鑄造されたのは1408年。つまり、重大な齟齬があり、史実とはとうてい認めがたい。

ただこのように、絶海と仲方など、初期日明関係に登場する禅僧が、あたかもスーパースターのように考えられていたことは、この後、医師たちの“活躍譚”にも大きな影響を与える。

4. 中華で“唐物”を調達する①——画僧雪舟

なかなか医学史に立ち入らなくて申し訳ないが、日明関係華やかにかなりし時代、中国でもっとも活躍した人物といえば、画僧雪舟等楊が挙げられよう。15世紀半ばに周防山口に移住して後、彼は「雪舟」の号を名乗るようになり、同じ臨済宗夢窓派に属する以参周省(大内氏の一族)らと親交を深め、応仁度遣明船(1467年出発)の大内氏経営船(三号船)に搭乗した。通説的なイメージでは、雪舟が中国で画技を高め(宮廷画家に学び)、日本を代表する水墨画家の地位を獲得した——と考えられていよう。

その根拠とされてきた史料が、雪舟が晩年に綴った、ほぼ唯一の自歴譜というべき国宝《破墨山水図》(東京国立博物館蔵)の自賛である。この自賛をもとに、明治時代以来、雪舟は当時名高い宮廷画家の長有声・李在に師事したと解されてきた。ところが、これは完全なる誤読だったのである。実際には、長有声(卑見では架空人物カ)・李在が「相随って」(ともに・つれだって)中国の先達・先輩から画技を学び伝えてきた、と書いてあるに過ぎない。雪舟は、彼ら宮廷画家と接点をもったことすら明確ではない(たぶん接触していない)。

では、なぜ雪舟は明の宮廷画家に引きつけて理解されるようになったのか。同じ夢窓派の大先輩、絶海中津らの活躍ぶりも想起されたのだろう。だが、近代における雪舟自賛の誤読以外に考えられるのは、彼と同途入明した医僧呆夫良心の撰した『天開図画楼記』の記述である。同記によると、雪舟は、礼部尚書(外務兼文部省長官)の命により、礼部の建物の壁に絵を描いた。やがて江戸時代には、雪舟が中華皇帝の命令で絵を描いたという話に膨らんだ。《中華幻想》の創成と膨張である。

5. 中華で“唐物”を調達する②——医僧良心

ここでようやく医師が登場する。上記の呆夫良心は、1474年、「畠山義勝」なる人物の使者として、神応経・八穴灸法を朝鮮国に伝えたことで著名だろう。明の洪熙元年（1425）、劉瑾が、師匠の陳会の『博愛書』10巻を抄出して成ったものが『神応経』であり、これに和氣・丹波氏の選定した『八穴灸法』を併せ、良心が朝鮮に伝えた。早くも翌年には、朝鮮王成宗の命で、『神応経・八穴灸法』として公刊され、壬辰戦争後の1643年に重刊された。これが日本に逆輸入され、正保2年刊本につながる。

さて、良心が加わった使節は「畠山義勝」名義のものであるが、実はこれは博多商人（博多息浜の宗金一族）・対馬宗氏が共謀して創出した架空名義の偽使であった。丹波・和氣由来という八穴灸法はともかく、良心が『神応経』をどこで手に入れたのかといえば、彼自身が応仁度遣明船で入明した際、中国で購求した可能性が高いだろう。

また、この良心が応仁度遣明船に搭乗した際の立場・役割は、貿易品を積み込む一商人、つまり客商であった。その類型名称は「千貫文衆」であり、卑見によれば千貫文分の商品を積み込めるクラスの商人を意味する（現在の米価比で、千貫文＝1億円強）。もちろん、千貫文のすべてを彼一人で拠出したわけではなかろうが、これだけの金品を動かせるだけの資力豊かな医僧であったことは間違いない。多くの医書を買漁ったのではないか。

それは良心だけに止まらない。遣明副使・正使として二度入明した策彦周良の旅日記をひもとくと、彼の地で、策彦が『医林集』『本草』『本草注』『奇効良法』などを入手していたことが分かる。このうち、策彦が買得した『医林集』一部10冊は、王璽『医林類証集要』の初版（1482年）ではなく、正徳刊本だろう。いずれにせよ、同書が天文年間に日本に将来されていたことを知る。なお、策彦『初渡集』には、「大醫張古岩来訪。累刻筆談。談了喫茶」という記事も見える。あるいは、策彦は、張古岩から『医林集』を入手した可能性もあろうか。曲直瀬道三にこれらの医書を流した存在として、策彦の存在も侮れない。

6. 中華で“唐物”を調達したか？——医師導道

ほかに中国で医書を求めた可能性のある人間を強いて挙げるとすれば、導道（ないし彼と同一人物とされる田代三喜）がいる。一般に、導道は中国へ留学して明の辞典的な医書というべき『名医雜著』を日本にもたらしたとされる。その年代についても諸説あるが、近年、導道は永正8年（1511）に入明し、王綸『明医雜著』を入手して大永4年（1524）に帰国したとする宮本義己説（「当流医学」源流考」2006年）が提起され、現在に至る。

しかし、日明関係史の実態を踏まえると、この仮説をそのまま認めることは極めて難しい。

論点の第1は、宮本説にいう“帰国便”の妥当性如何である。宮本の想定した導道の“帰国便”は、寧波の乱（1523年）を起こした大永度遣明船であり、帰朝年は1524年（大永度船のうちでも大内氏経営船で帰国）だという。ただし、大永度の大内船メンバーは、上陸後まもなく中国寧波の官憲を拉致・殺害し、火を放って帰途についた。そんな慌ただしいなか、中国に滞在していた人間が大内船に乗り込んで帰国できたとは到底考えがたい。

論点の第2は“往路”である。宮本説では、『明医雜著』成立年と、後世の史料にみえる“留学期間12年”説とを考慮して、永正度大内船（1511入明；正使＝了庵桂悟）で渡明していたと想定する。だが、そもそも明国内に長期滞在すること自体、当時はありえないことだった。たとえば、画僧雪舟の在明は、遣明1号船遅延という偶発的トラブルにより1年前後の余裕が生じたばかりのことであるし、しばしば5年間中国留学していたと説かれる桂庵玄樹も、実は雪舟と同じ応仁度船で即時帰国したことが分かっている。また、雪舟・桂庵・良心らと応仁度遣明船にて同途入明した僧盛訓は、密かに一団を抜け

出したものの明の官憲に捕まり罪に問われた。以上の例からも分かる通り、日本人が使節団と離れて個人的に明に滞在することは、まずありえない。日本人は、厳しく監視・管理されていたと見るべきである。

ただし、ごく僅かながら可能性のあるものとして、まさしくその永正度の遣明船が挙げられる。大内氏の息のかかった永正度遣明船(1・3号船)は、1511年に寧波へ入港したものの、翌年に南京までしか到達できなかった(北京上洛は許可されなかった)。当然、その滞在期間は短く、遣明使節の一員が当地の医師にかかったり、医書を購求するために短期間接触したりするのが精一杯だったろう。仮に導道が永正度船で渡明したとしても、ごく短期間の寧波滞在の最中に医書を購求できたに過ぎないだろう。ともあれ、あまりに徴証に乏しく、私はその可能性じたい極めて低いと見ている。

なお、田代氏の祖として知られる明監寺が渡明留学したことを示すのは、宮本義己の紹介した「江春之系図」(天正九年(1581)道三筆)のみであり、すぐに信じるわけにはいかない。下記①竹田昌慶の“事績”とよく似ており、対抗心から偽作された伝説なのではないか。たぶん、明監寺も洪武帝か永楽帝の時代に留学した、という“設定”だったのだろう。

7. 中華皇帝を治療した日本人?!——近世初頭に作られた“武勇伝”

16世紀、いわゆる戦国時代になると、細川氏や大内氏ばかりか、大友氏や相良氏などが、勘合を持つ(公式)と持たない(非公式)とに関わらず、遣明船をしばしば送った。おそらくそうした頻繁な日中交流の実績や記憶を背景に、“渡明先(なかんづく明廷宮中)で日本人医師が活躍する”という話が各処で創られていった。

①竹田昌慶(竹田氏の祖)……応安2年(1369)、明に渡って「明室」と号し、金翁道士について医学を学ぶ。秘伝を受け、その娘を妻とし、二子をもうけた。明太祖洪武帝の后が難産で、衆医が治療するも効無く、昌慶が召されて薬剤を投与したところ、皇子を安産した。そのため洪武帝より「安国公」に封ぜられたという。永和4年(1378)、数多の医書・本草書や銅人形を携え帰国した。足利義満に仕え、法印に昇進する。

②坂(吉田)浄運……明応年間に渡明して張仲景の方術(『傷寒論』)を習得して帰国した。その後、永正5年(1508)に『続添鴻宝秘要抄』(京都大学図書館本など参看)を撰した。足利義政や後柏原天皇を診察して治癒させ、のち法印に陞ったという。

③半井明親……和氣氏の後裔。明親は永正年間(1504-20)に渡明した。熊宗立(その子カ)に医学を学び帰国。その間、武宗(正徳帝)の病を治して驢馬を下賜されたと伝える。この故事から明親は「驢庵」と号し、後裔は歴代「驢庵」を襲称した。

④吉田宗桂(意庵)……足利義晴の侍医。天文7年(1538)遣明使湖心碩鼎らに従い入明、同10年帰国。再渡明を謳う史料もあるが、策彦の『再渡集』には見えず、実際には入明していないらしい。世宗(嘉靖帝)に謁し、その病を治して効があったことから、医書『聖濟総録』(北宋、1111~18年成立)200巻や数々の宝物を賜ったという。以後、同家は大いに栄えた。その息子兄弟が豪商角倉了以および名医吉田宗恂である。

⑤金持重弘……おそらく天文16年度遣明船で入明したのだろう、明の太医院御医(皇帝の侍医;正八品)の俞璉から、嘉靖28年(1549)付けの送別文を贈られている(宮内庁書陵部蔵)。これによると、儒書を読み医道に明るく、特に鍼灸に通じていたという。

以上のうち、①③④は、皇帝あるいは皇后など中国宮廷の中心部で、自ら「日本」流の医療行為を行わない、名を馳せて勇躍凱旋し帰国する、という筋書きである。中華文明にあこがれながらも、ただ称揚するだけでは済ませない、それを凌駕したいという、いじらしい《中華幻想》が看取れる。そして、

いずれの“事績”も中国側史料でウラが取れないことも共通する。とりわけ、④の吉田宗桂が嘉靖帝の治療に当たったというのは絶対にありえない。そもそも嘉靖帝は、日本の遣明使さえ引見することもないほど、政務外交に無関心であった。

もちろん、こうした捏造された神話の一方で、中国側史料に表れなくても、②⑤のように、日本に残る一次史料により、中国に渡航していたことが確かめられる事例もある。そういう裏付けのある例では、明の皇帝などの治療行為が吹聴されていないことにも注意したい。つまり、明廷の医官に最大限接近できたとしても、おそらく⑤程度が精一杯だったのではないか。確実に中国の医学界の一端に触れた者には、法螺を吹く必要などなかったのだ。

なお、和気（半井）明英が医術を学ぶべく、堺商人らの経営する天文13年度遣明使船に加わろうとしていたところ、同使節船団の派遣自体が沙汰止みに終わったことも最近明らかとなった。半井明英の並々ならぬ意欲の背景には、同時期の大内氏経営船で入明していた吉田宗桂（④）や金持重弘（⑤）へのライヴァル視があったかもしれない。

結詞

日本人が彼の地で接し得た医学界というのが極めて狭いものであったことは、改めて確認しておきたい。当時の日本人の中国語力からしても、短い時間、限られた地理的範囲で医学情報を手に入れるというのは至難の業であった。そこで、主流となる中国医道の摂取の途は、自ずと文献の入手にほぼ限られたと思われる。

また、以上見てみたように、医道をめぐる国際交流史、医術の《中華幻想》は、時代を追うごとに肥大化していった。そうしたなか、もっとも混沌として“何でもあり”の状況であった近世初頭には、“明皇帝の使節”謝用梓・徐一環を治療して高名を勝ち得たという、竹田定治（定加ヵ）なる人物が登場する。そもそもこの“明使”は、日明講和を急ぐ小西行長や石田正澄（石田三成の実兄）らが、同じく講和派の明人、宋応星と図って仕立てた偽使であった（謝用梓らは宋応星の幕下の人間に過ぎない）。そんな綱渡りの交渉中に、使節が死んだとなれば講和も水泡に帰してしまいうだろう。必死の看病と施薬がなされたのに相違あるまい。